植村正久「伝記的スケッチ」：解題・翻刻・翻訳

吉馴　明子

解題：植村正久「伝記的スケッチ」翻訳紹介にあたって

今回紹介する「伝記的スケッチ」3篇は、F.W.イーストレーキ編集の *The Tōkyō Independent* に1886年1月から2月にかけて掲載された小論である[1)]。これらについては、昭和女子大編纂の『近代文学研究叢書』第23巻の著作目録に収録され、雨宮栄一の植村正久伝3部作[2)]でも触れられ、秋山勇造の『新しい日本のかたち』[3)]にも紹介されている。しかしその内容は、斉藤勇が「植村正久論」に西行論を簡単に紹介しているだけ[4)]で、それ以外ではほとんど論じられていない。斉藤はこれらを小沢三郎から借覧したと書いているので、今回閲覧した明治文庫所蔵の *The Tōkyō Independent* は、あるいは斉藤勇が読んだものかもしれない。

1）“A Biographical Sketches. No.1” は、新年号に掲載された “Temmangu” であったことが、西行掲載の2号の記事から分かる。残念ながら、第1号は明治文庫にはなく、国内では見つかっていない。

2）雨宮栄一『戦う植村正久』新教出版2008年

3）秋山勇造『新しい日本のかたち』お茶の水書房2005年

4）斉藤勇「植村正久の文学的寄与」。また斉藤は植村の西行論が、西行再評価のきっかけになったとの愛山の言葉を「植村正久」で紹介している（ともに『想い出の人々』新教出版1965年に再録）。

古く変色して読みにくくなった紙面から英文を改めて翻刻し[5]、日本語訳を作ってみた。この作業を経て発見したことを各3篇それぞれにコメントを付す形でまとめてみた。全篇を読んでまず驚いたのは、明治初年の先輩の英語力の高さであった。また、その古典に対する学識の高さにも感服するほかなかった。もしかしたら、キリスト教に都合よくつまみ食いして紹介しただけではないかという思いは否定された。そのような面が皆無ではないが、それは植村の中で消化された上で意識的に書きかえ、補足されたとみるのがふさわしい。どのように加工されたかを問う過程で次のようなことに気づいた。本論はキリスト教文化の下で育った異言語の人たちへ日本の古典文学を紹介するために、植村自身がキリスト教のめがねをつけて見た叙述となっている。それを、後年の私がキリスト教のめがねをとおして読む。その時、私が比較的手軽に手に入れることの出来る古典の常識的な理解と比べることで、植村の意訳・翻訳と常識的理解とのずれが見えてくる。このずれを明らかにすることで、植村が日本の伝統的な文化からくみ取り、ふくらませようとしたものを読みとることができる。

少し具体的にいうと、たとえば植村は明治時代の仏教をあまり評価していない。日本文学のあり方についても批判的であった。そのような批判的見解は今まで、キリスト教文化に一方的に偏った批判とされ、植村の仏教論や日本文学論は取り立てて検討するに値しないと考えられてきた。その点彼のイギリス文学研究は、斉藤勇という傑出した学者によって原作の文脈をふまえて紹介され、英文学者の間でもその価値が認められてきたように思う。

しかし、日本文学については、たとえば笹淵友一による研究[6]は「キリスト教」研究の枠に閉じこめられ、日本文学一般の研究では軽んじられているようにみえる。たしかにこの3篇は、日本の古典文学とは異質なキリ

---

5) 翻刻・翻訳に際しては、恵泉女学園大学を2011年3月に卒業したトミカワ・マイザ並びに同大学非常勤講師の鈴木裕子の手を煩わせた。記して感謝する。

6) 例えば、笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』明治書院1958年

スト教文化を引証基準とし、これに即した説明と表現をとっている。日本文学の研究者には違和感があろう。しかし、これらキリスト教文化の視点からの文学論や仏教論を読むことによって、普通には気づかない一面が浮かび上がって来るのではないか。植村は古い時代の人々がその「世」でどのように生き、何を「自然」に求め、あるいは何を「自然」に託して表現し希んだかを描こうとした。言いかえれば、彼の古典文学紹介は、その世界に住む人々の内なる世界――人の霊性や信仰の姿――を見、それを植村なりのキリスト教理解と重ね合わせて描き出すものであった。その上彼はこの重なりを大切にして自分の感性を意識化し、ここから日本人の言葉でキリスト教を理解し思索し表現する努力を始めた。

植村のこの試みを学ぶことによって、日本の古典文学を理解する一つの切り口が見えるだろう。また、ここからさらに信仰と文化との関係についての理解や、彼の信仰の特質も見出されるに相違ない。私自身もようやく植村の文学論・仏教論研究にとりかかったばかりであるが、この「伝記的スケッチ」がより多くの人に用いられて、明治のキリスト教受容の特徴や、文化と社会研究に新しい切り口が開かれれば嬉しい。

Ⅰ．西行（1886.1.30）

「人生の価値とは何だろうか」という書き出しの文章がすでに、西行論がただの日本文学紹介でないことを示唆している。実は、植村が福沢批判を展開した1881-2年の「読福沢諭吉氏時事小言」[7] や、83年に書かれた「日本伝道論」[8] において、「人はどこから来てどこへ行くのか」を問わないで人生を送ることができず、これに答えるのが宗教の役目だと述べている。彼の西行への関心はこのような宗教的問いに大きく引きつけられてい

7)　植村正久「読福沢諭吉氏時事小言」1～5『六合雑誌』1881.11.25～1882.5.17

8)　植村正久「日本伝道論」『東京毎週新報』1883.8.29～9.26。なおこれら2つの評論については拙稿「若き植村正久の伝道路線」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第43号（2010.10.12）を参照されたい。

たのである。

始まりの部分で植村は西行の出家の様子を書く。西行は友人を一夜のうちに亡くして出家を決意したこと、まとわりついてくる娘をこの決意を鈍らせると縁の下へ投げたことなど、よく知られている話である。続いて、日本中を巡り歩いた時の天竜川の渡しでのアクシデントを紹介している[9)]。この箇所で植村は西行に、「ひどい仕打ちに遭っても我慢強く穏やかにしているのが仏教徒に相応しい態度だ。そうでなければ、世を捨てても何もならない」と言わせている。

この箇所は、「天璋院殿の葬送を観て感を記す」(83.12.14)[10)] の一節を思い出させる。植村家は1500石の幕臣であったが、幕府の崩壊に伴って没落し、正久が10歳の時横浜へ出、彼も父の薪炭業や豚飼いを手伝った。その後ブラウン塾などを経て牧師となる頃に、ようやく東京へ戻って来た。その頃の思いを以下のように記している。

> 明治九年に至り復び江戸の旧都に帰りて見れば……懐古の情しきり……一夕将軍家……東台に至る　さしも世に壮大なる堂塔伽藍も兵燹のために大方残余なく亡び失せ　霊廟の金色は夕陽に映じて……昔しの姿あともなし……余ここにおいてか感慨に堪えず……悲風面を打ち孤月皎々として樹梢現はる。是れ今より八年以前の事なりしが　爾来東台に遊ぶこと屢(しばしば)なりしかど　往日の感慨次第に薄らぎて　今日は余が彼の公園に往きて感ずる所毫も尋常の行客に異ならず　人情亦奇なるものありと云うべし。

---

9) 西行の伝記的叙述は、歌の詞書きの他「西行物語」を自伝的に用いていると思われるが、「西行物語」は後世の人の手になることが、現代では通説である。植村もそれを知っていたと思わせる箇所もある（西行の出家を悪魔が妨げるくだりについて “The buddhist biographer here says” としている。以下掲載の原文及び訳pp.146-147参照）。

10) 「天璋院殿の葬送を観て感を記す」『東京毎週新誌』1883.12.14

植村は、旗本から転落し、住居を失い、その日の暮しにも苦しむ困窮の極みで「ただ一人の神」を知らされ、キリスト教を信じた。それは単に「主人」を藩主から神に取り替えるというような悠長な回心ではなく、混沌のただなかで、己の運命を巻き込んだ混沌そのものをも支配する神の発見だった。それ故いつまでも「武士」のエリート意識などに捕われていてはならないのだが、生身の植村には、それはなかなか難しいことだったのであろう。そのような己の内面に照らして植村は西行を読み込んでいると思われる。西行の怒りをわざわざ取り上げたのは、否定すべき過去への思いを同行者が露わにしたと植村が読んだからであろう。これに通じる植村の内面の葛藤は、先の引用に記されているとおりである。幕末の騒乱から10年を経て江戸城跡に行った植村は、自分でも思わぬ感情の高ぶりに見舞われた。しかし、それから8、9年後、「今日は余が彼の公園に往きて感ずる所毫も尋常の行客に異ならず」と言えるまでになったと改めて述べている。それは、「爾来東台に遊ぶこと屢（しばしば）」の間に、ようやく持つことができた感情である。そうなるために、つまり現状を受け容れ神に仕える者に相応しい姿を獲得するために、植村は「屢」東台に行ったのかもしれない。そしてようやく己の感情を治めることができるようになった。それも亦「人情奇なる者あり」である。

天竜川の渡しでのアクシデントに続けて、植村はあの有名な「こころなき身にもあわれは知られけり　鴫立つ沢の秋の夕暮れ」を紹介して、この歌を英詩の形で次のように訳している。

私は僧の衣を着ているので、情熱は静かに抑制されている。
言葉や仕草が、魂の深い感情を露呈することもない。
それでも、草地（沢）の上を夕暮れに鴫が飛び立っていくと、
私の心の何かがため息をつく、そのように秋の夕暮れは私に触れる。

牧師植村も僧西行と同じく、その職業の故に普段は「言葉や仕草が、魂の

深い感情を露呈することもない」。しかし、「奇なるものあり」と自覚されている「人情」はチョットした出来事に、「触れ」られ、「ため息をつく」かもしれない。

さらに植村は、頼朝から下された銀の猫の話、四国滞在中に荒れ果てた崇徳院の墓参りをした時に詠んだ歌、世の煩わしさを逃れようと山深く歩みゆく歌などを紹介する。そして最後に、

願はくは花のしたにて春死なん　そのきさらぎの望月のころ

を挙げ、「彼の望みがかなえられた、と録すことができるのは悦ばしいことである」と結ぶ。まさか文字数の都合でもあるまいに、少々拍子抜けの感を免れない。

植村は、先に見た西行が断固として昔の栄華と決別する姿について「この時の自己否定の様はもっと評価されてもよかろうと思う」と述べた。ところが他方、西行の自己主張を肯定していると思われる箇所もある。「こころなき身にもあわれは」についての解説の後植村は、この歌が『千載集』に採られなかったことを知ると、西行が大変悔しがったこと紹介し、「それほど彼は上の歌に自信があったのである」と解説している。高橋英夫著『西行』によれば、「こころなき身にもあわれは」は西行自薦歌の『御裳濯河歌合』の評者藤原俊成にも評価されなかった。その理由は、「鳴立つ沢の…」の「心幽玄」に「こころなき身にも…」が理に落ちていて「姿及び難し」、西行の「我意」が目立つということであろうとしている[11)]。「自己否定」が徹底されてないということだろう。この不徹底さを植村は受け容れているのではないか。

「きさらぎの望月のころ」とは、いうまでもなく仏陀の命日である。植村はこの歌を次のようにパラフレーズしている。

---

11)　高橋英夫『西行』岩波書店1993年p.190

あぁ、満月が空に高い春に死にたいものだ。
かぐわしい桜の花が　横たわっている私の上に落ちてくる。

「僧」西行の願いと「歌人」西行の願いがともに満たされる死。そのような死を迎えることができ、「望みがかなえられてよかった」と植村は西行に語りかけているようだ。

弟子をしかりつけ、論敵を徹底的に論破する植村はよく知られている。「福音主義論争」の好敵手となった海老名弾正は、そのような植村を評して次のようにいう。植村君の悪魔は放し飼いで、人が訪問してくると「その家の飼い犬に吠えられる」ように、「悪魔に吠えつかれる」。しかし「吠えるのは飼い犬、主人とは全く別ものです」。論敵と目された者はたまったものではないが、「決して悪辣なのではなく、反って無邪気なものであった」と。他方、上の西行論からも分かるように、植村には些細な出来事に心を騒がせる「人情」をいとおしむようなところがある。悲しみ、迷いのうちにある時、寄り添い、神のうちに慰めを得るように導かれた信者も多いといわれる。彼は、悲しみ、憤り、悔いる魂を否定せずにいとおしみ、それがより全きものに向かって注ぎ出されることを願ったのではないか。西行論をとおして筆者が知り得た植村の「詩人」としての心は、植村が大切にした神に向けて注ぎ出される「霊性」の一端を示しているように思えてならない。

Ⅱ．平家からの１章（1886.2.6）

植村は平家物語の紹介を、その冒頭の「祇園精舎の鐘の音」の情景描写から始める。すなわち、「夕闇迫る静寂」に響く鐘の音は、仏教が広がっている東洋の国々に独特な宗教的な音だという。彼がこの紹介文を書いたとき実際にヨーロッパの教会の鐘の音と比較したわけではないだろうが、「賛美歌」の曲想やオルガンの音からヨーロッパの音の世界を想像しながら、それとは異なる日本の謡曲や琴・笛などの音の世界と比べつつ書いた

のかもしれない。この「祇園精舎の鐘の音」は、人々の住む街に漂う雰囲気や、それらの人々の心の内なる思い、それらはどちらかというと「悲しげな」「暗い」気分なのだが、を目覚めさせ、かつ「厳粛」な思いにさせるという。

このような前置きの後「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす」を「祇園の神社の鐘は全て地にあるものの移ろいやすさを思い出させる。沙羅双樹の花の美しい色はすべて生きているものは死すべきものであることを教える」と紹介する。この一節に代表されるように、平家物語は平家の興亡と彼らにまつわる戦い、恋、歴史が「荒々しく、美しく、自然に」描かれた興味深い物語だと解説している。

しかし、そのような物語の中から彼が選んで紹介している「1章」は歴史の表舞台に立つ武士の興亡の物語ではなく、「一種の舞姫、白拍子」の物語である。平家物語は、平家なかんずく清盛という権力者の興亡を通じて、「盛者必衰の理」を描いたものであるが、植村はここで「祇王」「ほとけ」を取り上げて、彼らにもてあそばれた歴史の影にいる白拍子を描き、すべて人が負わねばならぬ生者必滅の運命と、そのような運命を負わされるものが帰依する宗教に着目している。

特に、祇王が歌った「もえいづる」野辺の草も「枯るる」野辺の草もどちらも同じように「秋」に会わねばならぬという一節を、捨てられた祇王も召し抱えられたほとけも秋の冷たい風に吹き飛ばされ傷つくと解釈しており、もう一つの歌、「おなじ仏性具せる身を　へだつるこそ悲しけれ」につなぐ。しかも、祇王は清盛の大邸宅を辞して「我が魂の神らしき同胞と共に、荘厳な仲間の下へのぼろう」と嵯峨へ出家する。やがて、ほとけもこれに加わり、二人の女性たちは仏教に自分たちの生の充実を求め、武士の「栄華に愛想をつかした」と植村は描く。

ちょうど、西行論が「人生とはなんであろうか」をテーマとしたように、『平家物語』の紹介も、武士にとっての興亡を描くことを目的にして

はいない。むしろ、そのような時代に無常感が強く、人々の間に仏教が広まっていたことに関心を寄せた。そして歴史上では主役ではない人たちが仏教に慰めを得て生きる姿に光を当て、人々の間に広まっていた宗教の意味を問おうとした。キリスト教のめがねをかけて見たときに、白拍子のいう「仏性」の同等は重要であったに違いない。この仏教論はやがて、おそらく彼自身の清正公詣で眼のあたりにした庶民信仰としての「日蓮」論[12)]となり、「黒谷の上人」に結実するのではないかと思われる。

Ⅲ．紀貫之（1886.2.27）

植村は、貫之を和漢の古典に通じ、その上に仮名文学の独創的な型を作り上げた人物として取り上げている。従って、この小論は、植村の漢文学と和文学とについての考え方と、彼の貫之論の二つの点に注目して読むことができる。

1．和漢文学論

まず漢字と仮名文字についてみると、漢字は6世紀の初め頃に書き言葉として採用された。以後中国の古典が熱心に研究され、その背景としての中国の慣行も重視され、広く採用された。しかし、9世紀の終わり頃、中国古典研究のための留学制度が廃止され中国との交流が少なくなると、中国語の形式が日本人の間でくずれてきた。そこへ、日本人の特徴をより自由に表現する手段として仮名が登場したとする。

---

12) あまり知られていないが、植村にも小論「日蓮上人」がある。1884年3月に『日本評論』に掲載されたもので、内村が*Japan and the Japanese*で日蓮を取り上げたのとほぼ同じ時期である。鈴木範久は、*Japan and the Japanese*と日清戦争後に改訂された『代表的日本人』の比較をしているが、日蓮上人についてはほとんど差異がなく、内村自身を思わせる内容だと述べている（『「代表的日本人」を読む』大明堂1988年）。1911年に書かれた「黒谷の上人」と比べると「日蓮上人」は参考文献が少ないが、伝記としてのまとまりはある。しかし、植村の宗教観に通ずるものが少なかったためか、日蓮に対する評価は高くない。彼の仏教論については別途稿を改めて考えたい。

これらの漢字文学と仮名文学について植村は、次のように評価する。中国語（漢語）は、文字が煩雑で語彙も特殊な意味を内包している場合が多い。これを身につけようとして、日本人は中国文化の模倣に走り、日本人の日常感覚から離れがちであった。しかし、その言葉には道義的・知的に人を動かす力がある。これに対し、仮名文学は、たしかに人々の思いを自由に表現することができるのだが、あまりにも繊細、柔弱である。その形からもわかるように簡素で優雅ではあるが力強さがない。

植村には仮名の表音文字としての機能をローマ字に移そうとした時期がある。そうすれば、仮名文字の「形の美しさや優雅さ繊細さ」に引き込まれる危険を避け、代わりにローマ字表現から英文への道が開かれ、英語から日本語へはいるのが容易になると期待したからであった。実際 *The Tōkyō Independent* には、ローマ字・英文・独文対訳記事のページがあった。

上述の和漢文学論の背景には、宣教師や松山高吉、奥野昌綱と共同で行った聖書の日本語訳と、『新撰賛美歌』編纂の経験があるだろう。中国語聖書を参考に、漢字の熟語に和語のふり仮名がついた明治訳聖書、その文語文は今でも口語訳より力があると言われる。また、近代詩のはじまりを『新撰賛美歌』に求める説もあり、中でも植村訳の「ゆうぐれしづかに　いのりせんとて」から、藤村が「逃げ水」の「ゆうぐれしづかに、ゆめみんとて」との恋の歌へと翻案したのは有名である。植村自身、第1回欧米遊学や娘を亡くした時など、折に触れて詩を作っているが、初期のものは伝統的な枕詞が多く言葉づかいが煩雑な感じを受けるが、時代が下るにつれてリズム感のあるさっぱりした歌になっている。

２．紀貫之論

植村は貫之の代表作として『土佐日記』、『大井川行幸の記』、『古今和歌集』（仮名）序を挙げる。この選択に、文学は、政治や宗教を含めて人の営みすべてに関わるものだとする文学論が現われている。貫之は文学者としてだけ優れているわけではなく、土佐守としてもよい統治者であったに

相違ないという頼山陽の言葉を引いて、植村は『土佐日記』を、貫之の深い人間観察が見られ、地理的描写も正確で、優れた挿絵の選択と合わせて旅行記としても当時の社会をよく描きだしていると評価する。『大井川行幸の記』は、嵐山の美しい自然の中での帝ご一行の生き生きとした記録であり、『古今和歌集』序については、編者としての「詩的な想像力や、作者に対する鋭い批評眼」の高さを賞めている。植村は、貫之の多面的な作品を紹介することによって、貫之の目が自然の美しさだけにではなく、人が生きる自然と社会に向けられていることを明らかにしようとした。それは文学が持つ社会＝文化的な意義の確認であった。

そのことを前提として植村が貫之の歌の代表作として初めに紹介するのが、「人はいさ心も知らず」である。この歌は、ふるさとのなじみの宿主との間で交わされた歌であるから当然なのかもしれないが、植村の翻訳詩は変わらぬ花の香に託した思いを詩として意訳し、最後は、

花の懐に、何もまとわず、かぐわしい香りに抱かれ
あぁ、花は真実だと私は知っている。
あなたもそうだと、信じてよいだろうか。

と結んでいる。花の香りに変わらぬ思いを感じ取り、それに己が身をゆだねるところから、彼の訳詞は「あなたもそうだと」と、一歩踏み出しているのではないか。花鳥風月を愛で、自然の美しさを詠嘆するだけで終わる文学に、植村は満足しなかったのである。この立場は植村が後年、いわゆる「人生相渉る」論争に割って入り、『文学界』の高踏的傾向を「文字あるを知りて、人類あるを知らず。風流韻事の因虜となりて、活世界の元気を呼吸することなし」と批判したことに通ずる。[13)]

---

13) 「高踏とは何ぞや」『評論』1893年6月。愛山・透谷と植村の三つどもえの論争事情は『植村正久とその時代』第5巻（教文館1938）pp.558-575に、編者佐波亘の手により周到にまとめられている。

もう一つの歌は、「手にむすぶ水にやどれる月影の」である。ある評者は、「人生を譬えるのに、両手で掬った水に映る月影としたのは、理知的とも言えようが」と、貫之は理が勝ちすぎるとの通説を受けてこの辞世の句を紹介している。ところが、植村はこれにまだ上塗りをした訳詞をつける。

ここに、移ろいやすい光の世界を保つ、
過ぎゆく雲が、水面に浮かぶこころよい
月の光を、視界から消し去るまで。
その時、さざ波は暗闇の絶望に沈む。
そこで私は考えた、人生もかくのごとしと、
ほんの一瞬、我らは無上の喜びを味わう。
我らが知りうる人生の贈り物はほんのわずかだ、
見よ、雲がさっと通り過ぎぬまに。

ここでも植村は、詩情に宗教心を読み取っている。ほんの短い間に、我らは永遠への思いを贈られるのだと。「見よ」、瞬時にさし込む永遠を。

植村は、「黒谷の上人」において、大方のキリスト者が述べるように、日本では仏教がキリスト教への「教育掛り」の役割を果たしたと述べた。この「教育掛り」は仏教の教えだけでなく、その教えを成りたたせている法然の信仰世界をトータルに指していると思われる。そうであれば、「伝記的スケッチ」で紹介された古典文学の世界、詩情溢れる人々の心と人々が織りなす風情もまたキリスト教の「教育掛り」に数えられるであろう。「伝記的スケッチ」を通して、教えや信条以外に向けられた植村の感受性を知ることで、我々は植村のキリスト教をさらに深く広く理解することができると期待している。

Biographical Sketches. No. II. —Saigyō.

The Tōkyō Independent. Jan. 30, 1886

What is the worth of life? Thoughtful people of all ages have propounded this question. By those whose lives are full of activity, through which certain degrees of success are realized, it may not be so frequently asked, but disappointed ambitions, broken ties of affection, and the general miseries of social and political life are the fruitful sources of pessimistic tendencies. In natures whose thirst for happiness is too great to be satisfied by the shallow waters of worldly experience, or whose aspirations after an ideal moral life are painfully dissatisfactory, there is sometimes a tendency to end in believing that this world is an empty dream. When anarchy prevails, or the tyranny of the wicked is triumphant, or where the cruel institution of caste fetters men's souls, then it is not strange that the sense of life's vanity becomes so deep-reaching and wide-spread.

The subject of this hasty sketch, the priest Saigyō, was born in an age of corruption, when a period of anarchy and exasperating usurpation had just commenced. It needed no prophetic insight to predict the approach of evil days, for dark ominous clouds, holding storms and hurricanes within them, were already seen on the apparently calm sky of Kyōto; while the two hostile clans of Minamoto and Taira were in rival competition. In spite of the great abilities of Sato Norikiyo (the former name of the priest Saigyō), his prospects of promotion were limited. The Mikado treated him with special kindness, but was unable to promote him according to his own royal pleasure. The evils of life never fail to sadden a person of so sensitive a nature as that of Saigyō. For a long time he had cherished a strong desire to become a recluse, but natural tenderness held too great predominance in his soul to permit the decision that would enable him to carry out this idea. But like a Buddha, a Luther and a Wesley, so special and striking incident occurred which fixed his determination and settled

伝記的スケッチ No. Ⅱ. ――西行

The Tōkyō Independent. Jan. 30, 1886

人生の価値とは何だろうか。どのような時代でも、思慮深い人たちはこの問題に思いを致す。ある程度成功を収める活躍のできた人々はこういう問いを持つことは少ないかもしれないが、望みを遂げられず、愛情の絆が破られ、社会的、政治的な苦境に陥るとペシミスティックな思いが山のように浮かんでくる。この世の浅薄な経験では幸せへの渇望は到底満たされず、理想的な道義的生活が痛々しいまでに不満足な結果に終わったとき、この世は空しい夢にすぎぬとついに信じてしまいがちである。無秩序が世を覆い、暴虐、邪悪が世を支配し、身分制度が酷く人々の魂を拘束するならば、人の世の空しさは深く広く拡がらざるを得ない。

僧西行の簡単な紹介がこの文のテーマだが、彼は無秩序、腹立たしいほどの地位の強奪などが始まったばかりの腐敗した時代に生まれた。嵐や大暴風が起こりそうな暗い不吉な雲が表面的には平穏な京都の空に既に現れていて、予言者的な洞察力などなくても、邪悪な日々の到来を予告する事ができた。源氏と平家が相争っていたのである。佐藤義清（のりきよ）（僧西行の出家以前の名）の相当な才能を以てしても、彼の昇進の可能性は限られていた。帝は彼を特別に厚遇したが、それでも自分の意にそう程には彼を昇進させることはできなかった。西行のように感じやすい人は、人の世の悪戯で簡単に悲嘆に陥れられる。彼は長い間隠遁者になりたいという思いを抱いていたが、彼には常識的な柔軟さが勝っていて、この願いを容易には実行に移すことができなかった。しかし、仏陀、ルター、ウェスレーと同じように特別なできごとが起こって、彼はその決意を固め、将来の道を決め

his future career. One day towards evening, he was returning from attendance at Court with a friend of his own caste. As they journeyed in companionship, they arranged to attend the Court together on the following morning, and Saigyō, according to agreement, called early the next morning at his friend's house. When he reached the gate, he was met by persons, coming in and out, with sorrowful faces. Upon inquiring, he learned that his friend was dead. He was overwhelmed by this unexpected catastrophy; and entering the room where his friend lay, he saw the young widow of nineteen years, and the old mother of seventy, weeping bitterly on each side of the pillow. More than ever was he deeply convinced of the world's vanity, and almost desired to cut off his hair at once for the priesthood, —but it was necessary to forbear. In this solemn mood he went to the Court, chanting three odes as he sat on his horse. One of them ran as follows: —

Toshi tsuki wo
Ikade waga mi ni
Okuriken, kino mishi hito
Kyo wa naki yo ni.

Saigyō asked the Mikado's permission to become a priest, but his Majesty was greatly displeased because he was so attached to him. Saigyō passed some months in grief and disappointment. It was now autumn; again at evening he was returning from court; when he reached his own house his pretty little daughter of four years, whose childish locks had not yet reached her shoulders, came out to receive him, saying, "I am so glad to see you, my father, why have you returned so late, has his Majesty kept you so long?" The buddhist biographer here says, "the Devil, in order to prevent persons from becoming Buddhas, chains them by the ties of wife and children, and here was Saigyō's great hindrance." He was charmed by the appearance of the child and began to caress her, but he quickly withdrew himself and tried to keep her off; she returned, clinging to him; he was heart-broken, but in the spirit of a buddhist recluse thrust the child

ることになった。ある夕方のことであるが、彼は同じような身分の友人と宮廷からの帰途についていた。彼らは仲間で歩きながら、翌朝一緒に宮廷に向かう約束をした。そして西行は翌朝その約束どおりに、友人の家へ行った。ところが門のところで、悲しげな顔をした人々が出入りしているのに会った。訊いてみると、その友人が死んだというのである。彼はこの予期せぬ結末に打ちひしがれて友人が横たえられている部屋に入った。そこでは、19才の若い妻と70才の老母が枕もとの両側で泣き崩れていた。いつにもまして西行は世のはかなさを確信し、すぐにでも出家するために自分の髪を切り落としたいと思った。しかし何とか我慢をして、宮廷へ行った。馬上で彼は非常に厳かな想いで三句作ったが、そのうちの一句は以下のようである。

年月をいかで我が身に送りけん　きのう見し人きょうは亡き世に

西行は、帝に出家のお赦しを乞うた。しかし帝は彼をたいそう気に入っておられたので、ひどく機嫌を悪くされた。西行は悲しみと落胆のうちに数ヶ月を過ごした。秋になって、また夕方のことだが、彼は宮廷から帰ってきた。家に近づいたところ、彼の4才になるかわいい娘、その髪がまだ肩にも届いていない娘が、迎えに出て「お帰りなさいませ、お父さま、うれしゅうございます。それにしてもどうしてこんなにお帰りが遅かったのですか。帝がこんなに長く留め置かれたのですか」と言った。「仏僧になる邪魔をしようとする悪魔が、妻や子の絆で人を縛る。西行の邪魔をしているのもこれであった」と仏教者が書いている。彼は子のかわいらしさに惹きつけられたが、すぐさま身を引いて彼女から離れようとした。ところが娘は戻ってきて彼にすがりついたので、彼の心はつぶれそうであった。

from him down the portico. The cries of the little one brought out his wife, who was surprised at his strange conduct. That night he went out from his home and all that was dear to him, towards Saga, and was initiated by a priest who was a friend of his. This was October 15th (old calendar), 1140 A.D. He was about twenty three years old.

After Saigyō's initiation he wandered through every part of the land. His life was uneventful, and excepting one or two incidents, nothing is recorded illustrative of his character. On one occasion during his wanderings, Saigyō, with a companion priest, was crossing the swift Tenriu in a ferry-boat. Unfortunately, the boat was too crowded, and it was not considered safe to launch it. One of the crew cried out that some persons must go on shore again, and insultingly looking at the poor priest, ordered him to leave the boat as though he were nothing more than a 'piece of drift-wood,' —to quote the words employed when referring to priesthood by the lady Ise, who flourished just before Saigyō. But as, for some reason, Saigyō hesitated to obey, the man, in anger, gave him a severe blow on the forehead, which caused him to bleed. Saigyō quietly retired, and waited for another opportunity to take the boat; but his companion was indignant at this disgraceful treatment of Saigyō, who was his former lord, and wept bitterly over his changed circumstances. This displeased the priest, and he said, "to be patient and meek under harsh treatment is the proper spirit of a Buddhist, otherwise it is useless to forsake the world; you do not seem to have forsaken the world sincerely; leave me and do what you please, I must go alone." When we remember that Saigyō was a Samurai famous for his skill in the use of weapons and in every department of manly prowess, the degree of self-denial exhibited in this instance will be more fully appreciated. He then continued his journey, and after many days arrived at Oiso. It was an autumn evening, and this well-known poem was composed at that time: —

Kokoro naki
Mi ni mo aware wa
Shirare keri,

しかし仏教の隠遁者の心で娘を縁の下へ投げ落としたのである。幼子の泣き声を聞いて妻が出てき、彼の奇怪な行いに驚いた。そしてこれこそ彼の敬愛すべきところであるが、彼はその夜家を出、彼の友人の僧に案内されて嵯峨へ向かった。これは1140年10月15日（旧暦）のことである。彼はほぼ23才であった。

西行は出家後の修行を終えて日本中の様々なところを巡り歩いた。彼の生涯は静穏なもので、彼の性格を描き出すようなできごとは1、2の例外を除いては見あたらない。ある時、西行は仲間の僧と共に、天竜の早い流れを渡し船で渡ろうとしていた。困ったことに渡し船は混んでいて、船を出すのは危険に思われた。そこで、一人の船頭が「誰か岸へもどれ」と叫び、貧乏そうな僧をさげすむように見て、まるで「漂うている木片」――西行の前の時代に栄えていた伊勢の女が用いた言葉で言えば――にすぎぬかのように、彼に船から下りるように命じた。ところが、何故か西行がその命令にすぐには従わなかったので、その男は怒って西行の額をひどく打ちたたき、出血したのだった。西行はおとなしく下船し次の機会を待っていた。ところが彼の仲間は、昔西行が自分の主人であったので、この男の人をバカにした仕打ちに腹を立て、西行の境遇がすっかり変わってしまった事を想ってひどく泣いた。そのような態度を西行は苦々しく思い、「ひどい仕打ちに遭っても我慢強く穏やかにしているのが仏教徒に相応しい態度だ。そうでなければ、世を捨てても何もならない。君は本気で世を捨てているとは思えない。私を離れて自分の好きなようにするがよい。私は一人で行く」と言った。西行は剣術の優れた士であり、如何なる時も勇敢な行為をとることで有名であった事を考えれば、この時の自己否定の様はもっと評価されてもよかろうと思う。彼はその後も旅を続け、何日も経って大磯に着いた。それは秋の夕暮れで、この有名な歌がその時に作られた。

こころなき身にもあわれは知られけり　鴫立つ沢の秋の夕暮れ

Shigi tatsu sawa no
Akino yū gure.

Sinse I wear the priestly vesture,
Passions under calm control,
Never betray by word or gesture
Deep emotions of the soul;
Yet, when o'er the meadows flying
Little snipe at the twilight go.
Something in my heart is sighing
Autumn evenings touch me so;

When the imperial collection of poems known as the *Sengai* [*Senzai*] *shū* was being compiled, Saigyō felt somewhat anxious to know which, and how many, of his works were selected. He started for Kyōto for the purpose of ascertaining, and on the road met with a priest named Tōren, who informend [informed] him that many of his compositions were selected. Saigyō anxiously asked, "has my ode on the autumn eve found its place in the collection?" Being told that it was not chosen, he was greatly disappointed, and went back saying, "Then that collection is not worthy of notice," —so proud was he of the lines quoted above.

When he arrived at Kamakura, he was invited to an audience with the powerful Shōgun-Yoritomo. He complied reluctantly, and with the true spirit of mendicant. It is said that Yoritomo kept him all night with him, greatly enjoying his conversation on various literary, as well as military, subjects. The next morning as he was leaving the palace, tho Shōgun Yoritomo presented him with a silver cat, as a token of his high esteem and respect; but as the poor priest passed the temple of Hachiman where a number of happy children were playing merrily together, he gave the famous silver cat into their hands.

While staying in Shikoku, Saigyō paid a visit to the grave of an exiled Mikado, whose favours he had enjoyed in the early days of his worldly life. The Mikado had been deposed, perhaps unjustly. In order to avenge

私は僧の衣を着ているので、
　情熱は静かに抑制されている。
言葉や仕草が、
　魂の深い感情を露呈することもない。
それでも、草地〔沢〕の上を
　夕暮れに鳴が飛び立っていくと、
私の心の何かがため息をつく、
　そのように秋の夕暮れは私に触れる。

『千載集』と呼ばれる勅撰集が編まれた時、西行は、自分のどの歌が、どれほど選ばれているかを知りたくなった。それを確かめようと、彼は京都へ向かって出発した。その道で彼は登蓮という名の僧に会い、彼は西行の歌が沢山選ばれていると告げた。西行は「私の秋の夕暮れの歌はその中にあるでしょうか」と心配げに尋ねた。しかしそれは選ばれてないと聞くと、大変落胆して「それなら、その歌集は注目に価しない」といいながら帰って行った。それほど彼は上の歌に自信があったのである。

彼が鎌倉に着くと、将軍頼朝の接見の招きを受けた。彼はそれに修道僧〔mendicant〕のような心で渋々応じた。頼朝は彼を一晩中引き留めて、様々な文学的な話題、それに軍事的な話題についても、彼と楽しく話をした。翌朝西行が帰るときに、頼朝は西行に対する高い評価と敬意を表す印として銀の猫を下されたが、この貧しい僧は八幡様の横で楽しげに遊んでいた子供たちにその有名な銀の猫を与えてしまった。

四国に滞在していた間、西行は流罪となった帝〔崇徳〕の墓に参った。世俗の日々を送っていた若い頃、西行はその帝の好意を得ていたのだった。帝は、多分不当に退位させられていた。その復讐のために、彼（崇

himself, he attempted to make war against the ruling power, but was quickly defeated and sentenced to live in exile at Sanuki, in Shikoku. Saigyō's visit to the tomb was most graphically and pathetically described, by his own hand, in the *Senjiu-shō*, a book remarkably chaste and classically fluent. To quote his own words, "the Mikado's grave was discovered abandoned in the midst of thorns and brambles. No bell was sounded, no Sutras repeated, no ministering priest waited at his Majesty's tomb. The only sounds were those of the wind meaning the pine branches in sad and melancholy tones." Saigyō's loyal and poetic nature soon gave vent to his feeling in the following stanzas: —

Yoshiya, kimi,
Mukashi no tama no
Toko tote mo,
Kakaran nochi wa
Nanini kawa sen.

Shadows of night now surround me,
  Here at thy tomb;
Where is the glory that crowned thee?
  Here, all is gloom
Where, the past splendor and power?
  —Honors so frail—
Shattered thy tomb at this hour,
  Naught can avail.

Only the winds moan around thee
  Sorrow to vent;
Only the trees bow above thee,
  Homage, not meant.
Gems that bedeck'd thee, so royal,
  Thy jewelled bed,

徳）は支配者に対して戦いを挑んだが、簡単に打ち負かされて四国の讃岐へ追放された。西行の墓参りは、彼自身の手で目に見えるようにはっきりと情熱的に描かれている。その「撰集抄」は驚くほど洗練され、古典的に流暢に書かれている。彼自身の言葉を引いてみると、「帝の墓はイバラ、野バラの中に捨て置かれていた。鐘の音も、読経もなく、僧一人も寄り添ってはいなかった。聞こえてくるのは松の枝の間でうめくような悲しくも憂鬱な風の音だけであった」。西行は忠義な詩心から次のような歌を詠んだ。

よしや君昔の玉の床とてもかからん後は何にかはせん

夜の影が私を覆う、
　この墓にて、
あなたの冠であった栄光はいずこに、
　ここはすべて小暗い
昔の輝きと力はいずこに、
　栄誉はあまりにも壊れやすい
いまやあなたの墓は朽ち果て、
　空しい

ただ風だけがあなたのまわりに唸り、
　悲しみを現す
ただ木々があなたに頭を下げるが、
　敬意を表しはしない
とても忠実にあなたにまとわりついていた者、
　宝石をちりばめた臥所

All who seemed faithful and loyal
  Fail thee, O dead!

On another occasion sick at soul and weary of his meditations on the miseries of life, he composed these lines, —

Shi ori sede
Nao yama fukaku
Wake iran;
Uki koto kikanu
Tokoro ari ya to.

Oh, to wander high and higher
  O'er the rugged mountain way;
Lose myself in tangled woodlands
  Where no other pilgrims stray;
Make no footprints, drop no flowers
  That might guide to swift return;
Searching for the Elysian bowers—
  Breathing in the ambient air—
Till not faintest sigh of sorrow,
  At I rested, reached me there.

Saigyō has written very many poems of great merit, all of which are collected in the *Sanka-Shiū*. Some of his epistolary writings are also noted for their excellence. During his last years he settled in Kyōto, near Higashi-yama [Nishi-yama], and built a small Buddhist shrine; here he planted cherry trees, of which he was very fond, in his garden. He sometimes expressed his desire to die on the anniversary of Buddha's death, and he composed the following lines in which he gives expression to this wish and his admiration for the flowers of the cherry-tree, —

信義が厚く、忠実にみえた者全てがあなたを見捨てた、
　おお死よ

時には、人生の悲惨さを思いめぐらし、心も折れてしまって次のような歌を詠んだ。

しをりせで　猶山深く　分け入らむ 憂きこと聞かぬ　所ありやと

たかく、いやもっと高く、
　荒れた山をさまよう
他の巡礼者が足を踏み入れたことのない
　入り乱れた道に迷う
あるいは道を戻るときの目印になるやもしれぬ
　足跡も残さず、花も落とさず
周りの空気を胸一杯に吸いながら
　もっと良い休息所を探して歩む
私の休むところに、
　少しでも悲しみのため息が聞こえないように。

西行は素晴らしい歌をたくさん詠んだが、それらはすべて『山家集』に収められている。彼の手紙様の書き物も優れている。晩年は京都東山近く〔正しくは西山〕に仏教の庵を建てて住み、その庭に彼が好きだった桜を植えた。彼は時々仏陀が亡くなった日に死にたいとの願いを時々口にしていたが、その願いと桜の花への賛美とを込めて次の歌を詠んだ。

Negawaku wa
Hana no moto nite
Haru shi nan
Sono kisarugi [*kisaragi*] *no*
Mochizuki no kura

Ah, let me die in Spring time,
  When the moon is full on high,
And the fragrant cherry blossoms
  Fall upon me, where I lie.

It is pleasant to record that his desire was fulfilled in the seventy-third year of his age.

Biographical Sketches. III. —A Chapter from the Heike.

The Tōkyō Independent. Feb. 6, 1886

There is a mysterious sympathy with sounds in our nature. The sounds of bells have furnished the theme for many a poet's immortal song. The religious tone of a people seems to vibrate in the bells, and certain marked features of national character may be traced in their peculiar peals. In all Eastern countries where Buddhism prevails, the tolling of the bells may literally be considered a monody. When in the silence of the deeper evening hours one hears them palpitating on the air, all the avenues of the soul, where memory rests and melancholy meditations lie, at once open. A world of solemn thoughts seems to come out of the gloom of our own menaced selves as we listen.

"The bells of the Gi-on shrine remind us of the mutable nature of every

願はくは花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月のころ

あぁ、満月が空に高い春に死にたいものだ
かぐわしい桜の花が　横たわっている私の上に落ちてくる。

73才で彼の望みがかなえられた、と録すことができるのは悦ばしいことである。

伝記的スケッチ Ⅲ. ――平家からの一章

The Tōkyō Independent. Feb. 6, 1886

自然の音には神秘的な共鳴がある。鐘の音は多くの詩人に永遠の歌のテーマを与えてきた。人々の宗教的な音色が鐘の中で振動し、国の際だった特徴は鐘の独特な音に跡づけられるかもしれない。仏教が拡がっているすべての東洋の国々で、鐘をつくことは文字通り哀歌と考えられている。夕闇迫る静寂の中でその音が響いて来るのを聞くと、思い出や悲しげな瞑想が宿る魂の道がすぐ目の前に現れる。聞いているうちに、自分自身のおどおどした暗い気分の中から厳粛な思想世界が現れてくる。

「祇園の神社の鐘がすべて地にあるものの移ろいやすさを思い起させる。娑羅雙樹の花の美しい色はすべて生きている者は死すべきものという

thing earthly. The beautiful colors of Sharasoju's flowers teach us the sad truth that all life is mortal." These oft-quoted words open the *Heike Monogatari*, and the contents of this classical history well accord with the sentiment they express; for the book tells of the once flourishing grandeur of the Taira clan, and of its rapid downfall; it recites the rapturous luxury of Kiyomori and the mournful fate that befel [befell] his sons; it narrates exciting battles and scenes of domestic tragedy; beautiful stories of love, and facts of the deepest interest to the student of history: there are exquisitely described in a simple, unpretentious, delightfully uncultured way; rude and beautiful and harmonious as nature itself. The blind mistrels of long ago used to chant selections from this book, their quaint "sing-song" being accompanied by the *biwa*, a sort of guitar. Whenever a *biwa-hōshi*, that is to say, a guitar-priest, is invited, it is understood, as a rule, that he is to recite the *Heigo*, or *Heike Monogatari*. Persons who are sufficiently learned to understand the classical language find it exceedingly interesting to listen to the minstrel, who not infrequently makes his audience weep in sympathy with his songs.

The over-refined, luxurious, Imperial Court was steadily losing its power through effeminacy and mis-government, when Taira no Kiyomori appeared on the stage. From an inferior office he gradually raised himself to the highest position in the State. The military power was then in the ascendency (12th century A.D). Kiyomori seemed to ignore the existence of the Mikado, the sacred successor to the divine throne of the sun. Practically, he became the Emperor of Japan. The tyrant ruler indulged in many extravagant luxuries, and his domestic life was far from being pure. In his gorgeous palace, at Nishi-hachijō, Kyōto, a most beautiful young lady, named Giwo, resided. Originally she was a *shirabyoshi*, a sort of dancing girl, but not so despicable or immoral as the present *geisha*. When dancing, the *shirabyoshi* wore a broad robe, a court cap, and a sword. Many of these girls were quite learned and sang pieces of their own composition. Kiyomori loved Giwo very dearly, and in the palace no one was more respected than she. Her fortune and prosperity were talked of throughout all the country. The author of the *Heike* even goes on to say that "many

悲しい真実を教える。」しばしば引用されるこれらの言葉が平家物語の始まりであり、この古い時代の歴史物語の内容は、この一節が表現している感情によくあっている。というのも、この書物は、平一族が一度は華々しく栄え、しかし急速に落ちぶれたこと、清盛が頂点を極めた栄華を誇り、しかしその息子たちは惨めな運命に甘んじなければならなかったこと、派手な戦いと悲惨な国内の有様、恋の美しい物語など、歴史を学ぶものに興味のつきない物語である。これらは単純で、飾らない、愉快なまでに粗野に――自然そのものがそうであるように、荒々しく、美しく、それでいて調和に満ちている――みごとに描かれている。遠い昔の盲目の吟遊詩人がこの書物から選んだ曲を歌ったものである。彼らの風変わりな弾き語りの歌謡は一種のギターである琵琶が伴奏であった。ギター坊主とも呼ぶべき琵琶法師が招かれるときはいつでも、平語、つまり平家物語が例外なく謡われるものとされていた。古典語を理解できる十分に教養のある人々は法師の謡いを聞くのを非常な楽しみとし、法師も彼の歌に共感する聴衆をしばしば泣かせるのであった。

あまりにも洗練された、贅沢な帝の宮廷は軟弱さと統治の失敗によりどんどん力を失っていったが、その時期に平清盛が登場した。彼は下級の官職から徐々に昇進してついに国家の最高位まで上り詰めた。その頃（12世紀）軍事力がものをいうようになってきていた。清盛は帝、太陽の神〔天照の神〕の聖なる継承者である帝、の存在は無視していたようだ。彼は事実上日本の皇帝になった。とてつもない宝物にふける専制的な支配者であり、彼の私生活は清純というには程遠いものだった。京都の西八條にあった彼の豪華な大邸宅には、祇王という名の大層美しい若い女性が住んでいた。彼女は元は一種の踊り子、今の芸者のように卑しく不道徳ではない、白拍子であった。踊るとき、白拍子はたっぷりとしたローブを着、宮廷の帽子、それに刀を身につけていた。これらの女性の多くは教養があり、自分たちが作曲した歌を歌った。清盛は祇王をたいそう愛していて、大邸宅で彼女より敬われているものはいなかった。彼女の運の良さと栄え

ambitious parents took the initial character of the lady's name, and called their daughters accordingly, if haply [happily] they also might thus become as fortunate as she." Giwo had spent three merry, happy years of her life in the palace, years that seemed but as days; when sorrow came. Another *shirabyoshi*, named Hotoke, who had recently arrived at Kyōto, from the province of Kaga, became widely known and very popular among the circle of nobles. One day she said to herself, "Now that I am so celebrated and so popular, I should be perfectly satisfied with my lot if it were not for one thing: up to this time I have never been invited into the presence of the powerful prince Kiyomori. Is not this a great pity! I shall go to Nishi-hachijō and see whether I cannnot obtain an audience, for a lady, especially a *shirabyoshi*, might be generously treated and not too severely censured for her presumption." So she went to Kiyomori's palace. But the Prince did not care to see her. "I have my Giwo here," he said, "even a Buddha (*Hotoke*) I am not disposed to see." Giwo, however, was a generous and kind-hearted woman; she pitied the young *shirabyoshi*, and persuaded the tyrant to call her in. Hotoke was returning from the palace in despair, when she was recalled. Gratefully she hastened to Kiyomori's presence, and by his order very sweetly sang an *imayo*, and said: —

"*Kimi wo hajimete*
Miru toki [*ori*] *wa,*
Chiyomo henu beshi.
Hime komatsu

O-mae no ike no [*naru*]
Kame-oka ni,
Tsuru koso mureite
Asobu mere."

は国中に語り伝えられていた。平家の作者は「野望に満ちた多くの親たちは彼女の名前の最初の文字を取って、その娘につけ、彼女と同じように幸せになるかもしれぬと願った」と書いているほどである。祇王は三日としか思えぬ三年の楽しい幸せな日々を大邸宅で送ったが、ついに悲しみがやってきた。ほとけという名の、近ごろ加賀からでて来たもう一人の白拍子が貴族の間で広く知られ人気があるようになった。ある日のこと彼女は独り言を言った、「今や私はこれほど皆にほめられ、もてはやされるようになったのであるから、一つのことを除けば、私の運命に完全に満足すべきである。いままで、私は力ある清盛殿下の前に召し出されたことがない。これは哀れではないか。私は西八條へ行って聴衆の興味を引くことができぬかどうかやってみよう。というのも、女、特に白拍子は寛容に扱われていて、厚かましくても厳しくお咎めを受けないかもしれないから。」そこで、彼女は清盛の大邸宅へ行った。しかし清盛は彼女に会おうとはしなかった。「私には祇王がいる」と彼は言った。「たとえへほとけ（仏陀）であっても、私は会う気にならぬ。」祇王は、しかし、心が寛く優しい女性であった。彼女はこの若い白拍子を憐れみ、暴君に彼女を召し入れるように説得した。呼び戻されたとき、ほとけは絶望して大邸宅を後にするところであった。喜んで彼女は清盛の御前へ戻り、彼の命令でたいそう甘い今様を謡って言った。

君を初めてみるおりは　千代も経ぬべしひめこ松
おまえの池なる亀岡に　鶴こそ群れゐてあそぶめれ

She performed, too, the *mai* (dancing) most gracefully, and Kiyomori's heart was captivated with the beauty and loveliness of Hotoke. He began to dislike Giwo, and immediately sent her back to her home. Giwo was grieved at the capricious conduct of the licentious tyrant, but as there was no help for it, she left the palace where for three years she had enjoyed such dream-like happiness and such splendor. As she left her room she wrote a poem on the paper door: —

> "*Moye izuru mo*
> *Karuru mo onaji,*
> *Nobe no kusa*
> *Izure ka, aki ni*
> *Awade hatsu beki.*"

Where the dead leaf falls, let the fresh shoot spring,
  Together kissed by the same sunbeam,
(But a tyrant's heart is a fickle thing) —
  And the little plant with its tender green,
Must meet the winds of the Autumn chill,
  That strip the trees against their will,
And whirl away
  The leaves that lay,
With the broken roots
  Of the tender shoots.

Disgraced and sorrowful, she returned to the old home where her mother, Toji, was living. Some time after, Kiyomori observed that Hotoke was looking very sad, and in order to afford her amusement, he sent a message to Giwo commanding her to come back to the palace, —not to be reinstated in his former favor, but to sing and dance for Hotoke's pleasure. Naturally she refused to comply; but as Kiyomori threatened to kill her mother if she should disobey his order, she was compelled to consent. Mortified and forlorn, she appeared at the palace, and in compliance with

彼女は舞もたいそう優美におどった。そして清盛の心はほとけの美しさと可愛さに囚われてしまった。彼は祇王を嫌い始め、すぐに彼女を家に送り返してしまった。祇王は放蕩な暴君の移り気な行動を悲しんだが、助けがなかったので、三年間夢のように幸せで輝かしい日々を送った大邸宅を去った。彼女は部屋を去るときに障子に歌を書き付けた。

もえ出るもかるるもおなじ野辺の草　いずれか秋に会わではつべき

枯れた葉が落ちる所には、新しい葉がめぶく。
　どちらも日の光の接吻を受ける。
（しかし、暴君の心はきまぐれだ）
　そして柔らかい緑の小さな植物は、秋の冷たい風に会い、
　　風は木々の意に反して丸裸にしてしまう。
そして、散っている葉っぱを、やわらかい新芽の
　傷ついた根ともども吹き飛ばしてしまう。

祇王は、辱められ悲しみのうちに母（刀自）の住む古い家に帰った。しばらく後、清盛はほとけがとても悲しそうなのを見た。そこで、彼女を楽しませようと祇王へ使いを出し、大邸宅へもどってくるようにといった。それは、彼のお気に入りへの復職ではなく、ほとけが喜ぶよう、歌ったり、踊ったりせよということであった。当然のことながら、彼女は従おうとしなかった。しかし、清盛がもし自分の命令に背くなら、彼女の母を殺すと脅したので、彼女は従わざるを得なかった。悲しみを抑え、わびしい

the cruel request she performed the dance, singing at the same time the following *imayo*, which she composed for the occasion: —

> "*Hotoke mo moto* [*mukashi*] *ha*
> *Bonhu nari.*
> *Warera mo tsui ni wa*
> *Hotoke nari;*
>
> *Onaji Busshō*
> *Guseru mi wo*
> *Heda tsuru koso wa*
> *Kanashi kere.*"

Now, O Prince, I still obey thee,
  Sing my song to thee alone;
And thy favor'd one may scorn me,
  As I dance before thy thorne.

Hotoke,* thou mystic Buddha!
  Hotoke, my rival's name,
Hotoke, the soul within me,
  Gods and I, endowed the same.

Though this palace, without escort
  I must leave, by cruel fate,
I shall rise to stately consort
  With my soul's diviner mate.

The song touched the hearts of those present. Some were sobbing. The tyrant was conscience-striken. He could no longer bear the sight of Giwo's dancing, and sent her home with some trifling gift. To escape such disgrace and misfortune in the future, Giwo, with her mother and a sister named Ginyo, left Kyōto and retired to Saga, not far from the holy city. At

思いを抱きながら彼女は大邸宅に現れた。そして残酷な所望に従って、舞を舞い次のような今様を歌った。

仏も昔は凡夫なり　我等も終には仏なり
おなじ仏性具せる身を　へだつるこそはかなしけれ

さあ、王子よ、私は今もあなたに従う
　我が歌を、あなたのためにだけ歌おう
あなたのお気にめす方はあざけるかもしれぬ、
　私があなたの玉座の前で踊るのを。

ほとけ*、神秘的な仏陀よ
　ほとけ、我がライバルの名
ほとけ、我が内なる魂
　神々も我も同じく授けられている。

この館をお供もなく、
　残酷な運命によって　去らねばならぬとはいうものの
荘厳な仲間のもとへのぼろう
　我が魂の神らしき同胞とともに。

この歌は、居並ぶ人々の心をとらえ、あるものは涙した。暴君も良心のうずきを覚えた。彼はそれ以上祇王が舞う姿を見るに堪えず、つまらぬ土産を持たせて家へ帰らせた。このような辱めと不幸に二度と会わぬために、祇王は、その母と妹の妓女とともに、京都を去り都より遠くない嵯峨へ退

Saga, the historical place for retirement of many celebrities, they took a small cottage, shaved their heads, and became nuns. Weary of the world, disgusted with its vanities, these three gave themselves wholly up to the doctrines of Buddhism.

Not many months had elapsed when, towards evening, they were surprised by a strange knocking at the door. When the door was opened there stood the beautiful Hotoke! With tears she begged their forgiveness, and told Giwo that the poem she had written on the door, and the piece she afterwards so touchingly sang, had moved her heart and revealed to her the misfortunes of this life. She had resolved to leave the palace at once, but was hindered by circumstances. Quite recently she had been informed of Giwo's present condition, and the place of her residence. Secretly she quitted the palace in disguise and came to Saga, in order to join Giwo in her consecrated life.

*Hotoke, the name of Giwo's lady rival, also means the soul after it leaves the body, and is one of the appellations of Buddha.

Biographical Sketches. IV. —Ki no Tsurayuki

The Tōkyō Independent. Feb. 27, 1886

The period of Yengi (10th Century A.D.), is one of the most enlightened in the annals of this land. Literature and the classics flourished, and every species of refined culture attained a perfection unrivalled by any other age in the history of Japan. A crowd of illustrious scholars, writers and poets adorned the Court, and added to its labored splendors. Among the brilliant stars of culture, Ki no Tsurayuki occupied a most prominent position.

In his time, Chinese had already been adopted as the written language of Japan; for it was from the time of the Emperor Kimmei (540 A.D.), that the Chinese classics began to be studied very extensively, and as all

いた。多くの名士たちの歴史的隠遁所であった嵯峨では、小さな小屋に住んで、頭をそって尼になった。世の中につかれ、栄華に愛想をつかして、これら三人は仏教の教えを学ぶことに没頭した。

それから幾月も過ぎぬある夕方、思いもかけずドアを叩く音に驚かされた。戸を開けるとそこには美しいほとけが立っていた。涙を流しながら彼女は彼らに赦しを請い、祇王が障子に書いた詩や、後に彼女が感動的に歌った歌がほとけの心を動かし、自分の生活の不幸せを悟らせたと祇王にいった。彼女はすぐにも大邸宅を去る決心をしたが、色んな事情でできなかった。最近になって彼女は祇王の様子や住居について知った。秘密裏に彼女は変装して館を辞め、祇王の聖なる生活をともにするために嵯峨へ来た。

*祇王のライバルの名である「ほとけ」は、肉体を離れた魂の意味でもあり、仏陀の呼称でもある。

伝記的スケッチ Ⅳ. ――紀貫之

The Tōkyō Independent. Feb. 27, 1886

延喜時代（10世紀）は日本の年代記の中でもっとも輝かしい時代の一つである。文学や古典が栄え、様々な種類の洗練された文化が他の時代の競合を許さぬほど完成に近づいた。非常に多くの有名な学者、作家、詩人が宮廷を崇め、その豪華さを増した。文化の輝かしいきら星の中で紀貫之は最も卓越した位置を占めている。

貫之の時代には、漢字が日本語の書き言葉として採用されていた。それは欽明天皇の頃（510年）からである。そのため、中国の古典が広範囲に研究・学習され、全般的に、中国のしきたりが非常に賞賛され採用され

Chinese customs were exceedingly admired and adopted, the graphic system came entirely into use; and every important document, whether public or private, was drawn up in the square characters of China. About the time of the Emperor Daigo (898 A.D.), in accordance with the advice of Kwankō, the government abolished the custom of sending students to China for the purpose of acquiring the language, and as the intercourse with that classical country became less frequent, the pronunciation of Chinese and its grammatical construction became corrupted among the Japanese. The creation of a hybrid style of literature may be attributed to this confusion, in which another circumstance was also instrumental. A foreign language is not the proper medium through which a nation's genius can develop advantageously; and especially a ponderous language like that of China, with its intricate characters and labyrinthine vocabularies. The Japanese nation, dazzled by the culture and refinements of its more advanced neighbor, had forgotten itself in the eager imitation of Chinese civilization. But nature, as in other instances, could not be forever repressed. Gradually the great inconvenience of a foreign language was realized, and the nation individually felt very uneasy, like David in Saul's unwieldy armour. Out of the hybrid and at the time monstrous graphic system was evolved the beautiful *Kana* style of classical Japan, known as *Onna moji:* so called because it was at first exclusively used by ladies. Men thought it beneath their dignity to write in *Kana*, and endeavored to adhere to the dead letters of China.

Just at this juncture Ki no Tsurayuki appeared. Equally well versed both in Chinese and Japanese classics he boldly set himself to the moulding of a distinct style of literature. The work could not have fallen into abler hands. The *Tosa nikki*, *Ōigawa gyōkō no ki* and the preface to *Kokinshū*, were the production of his masterly pen. These celebrated works of Tsurayuki were the original type of the pure *Kana* style. *Tosa nikki*（土佐日記）gives the account of his journey from the province of Tosa, where he remained for five years in the capacity of governor. Rai Sanjō referred to this circumstance when he said; "It is impossible that Tsurayuki was a mere poetic genius, as many people are prone to conjecture. In all

た。漢字という文字表現が全面的に使われるようになり、公私を問わず全ての重要な書類は中国の角ばった文字で書き上げられるようになった。醍醐天皇の頃（898年）に菅公〔菅原道真〕の助言によって、言葉を習得するために学生を中国へ送るというしきたりを取りやめた。またこの古い国との交流が少なくなったので、中国語の発音や、その文法的な構成は日本人の間で壊れて来た。混成型の文学の誕生はこの混乱に帰する事ができるかもしれないが、その場合もう一つの状況が働いた。外国語は、国の特質の強みを発揮するのに適してはいない。特に煩瑣な文字と込み入った事情のある語彙を持つ中国語のような取り扱いにくい言語の場合はなおさらである。より先進的な隣国の文化とその精緻さに目をくらまされて、日本の国は中国文化の模倣に我を忘れた。しかし、他の場合もそうだが、本性はいつまでも押さえつけておくことはできない。だんだんと、外国語の不便さが自覚され、日本の国それ自体も、サウルの不格好な鎧をきたダビデと同じで、ぎこちなく感じ始めた。混成型の、そして当時は奇形のような文字表現から、女文字と呼ばれる、それは初め女性によってだけ用いられたのでそう呼ばれるのだが、伝統的な日本の美しい仮名形式が生まれたのである。男性たちは、仮名文字で書くなどということは彼らの威厳の許さぬことで、命のない漢字〔中国の文字〕に固執し続けたのである。

この変わり目に紀貫之は現れた。中国と日本の〔漢文と和文の〕両方の古典に精通していた彼は、独特な形式を持つ文学の形成に取りかかった。この仕事に彼より適任だった人はいないだろう。『土佐日記』、『大井川行幸の記』、そして『古今集』の序は、彼の熟練した筆の産物である。これら貫之の見事な作品は純粋な仮名スタイルの原初型〔独創的な型〕である。五年間統治の責についていた土佐からの旅について『土佐日記』で語っている。頼山陽が次のように言っているのはこのことを指しているのである。「多くの人々が推測しがちなように、貫之が詩の分野だけの天才だったということはあり得ない。たぶん彼は政治家らしい能力と行政面でのきびしさを持つ人物だったろう。土佐の人々というのは大変面倒な臣下

probability he was a man of statesman-like ability and administrative acuteness. The people of Tosa were most troublesome subjects, and the coasts were from time to time exposed to the inroads of daring pirates, such as Fujiwara no Sumitomo." No book ever produced in Japan is so happy in its choice of illustrations, so pathetic in the delineation of human nature so chaste in its humor, so accurate in detail and geographically reliable. The production entitled *Ōigawa gyōkō no ki* is a lively account of the emperor's excursion to Ōigawa, a beautiful stream flowing beneath the picturesque Arashi-yama near Kyōto.

The preface to the *Kokinshū*, which is a collection of ancient and modern poems, is full of poetical imagery and keen criticisms of the different authors, which give evidence of superior ability, and testify to the high genius of its composer.

But here a question naturally suggests itself: if the *Kana* literature was a native production, and so congenial to the Japanese mind, why did it not become predominant and succeed in supplanting the unnatural adoption of the Chinese characters? One of the chief causes of this strange phenomenon may be attributed to the fact that *Kana* literature, notwithstanding its superiority in some respects, was morally and intellectually behind the Chinese literature. As it, at first, was styled *Onna moji*, so it continued in its characteristics with but few exceptions. It was the written language of elegance and beauty. Its themes were suitable for leisure hours, but not for earnest action nor contact with the busy world, with its pangs of life and death. The whole of the *Kana* literature was characterized by effeminacy and permeated with trivialities. It lacked the moral strength and intellectual power to lead and conquer. The Buddhists of later times did, indeed, attempt to popularize their religious tenets by issuing their books in *Kana*. But, unlike Luther's German Bible, or the venerable version of King James' reign, these books lacked the moral grandeur and convincing strength that could penetrate and sway the depths of Japanese character. In fact, while the *Kana* writings were pretty and symmetrical in form, and native to the soil of Japan, they lacked vitality and stirring sympathy with the greatest forces of the mind. A

たちだし、海岸はいつも藤原純友のような勇ましい海賊たちの侵入の危険にさらされていた。」今まで日本で発行された本で、挿絵の選択も楽しく、人間性の描写がこれほど情熱的で、これほど洗練されたユーモアに満ち、細部にわたってこれほどはっきり地理的にも正確に書かれている本はない。『大井川行幸の記』と題する冊子は帝が大井川〔桂川上流〕――京都近くの絵のように美しい嵐山の下を流れる美しい流れ――へ出かけたときの生き生きとした記録である。

『古今集』――昔と今の歌集――の序には、色々な作家に対する詩的な描写や鋭い批評がたくさんあるが、それは著者の並はずれた能力や高い天分を証明している。

しかし、ここに自ら問題が出てくる。もし仮名文学が本来この土地のものであって、日本人の気性に合ったものだというなら、なぜそれは主流になって、不自然に借用された漢字にうまく取って代わることができなかったのか。この奇妙な現象の理由の一つは、かな文学は、いくつかの点では優れていたにもかかわらず、道義的・知的に中国文学に遅れをとっていたということにある。最初に、女文字と形造られたように、少数の例外を除いて、その特性はずっとそう〔女性的〕であった。それは優雅さと美しさの書き言葉であった。そのテーマは余暇のものにふさわしく、全身全霊を込めた行為や生と死の苦悶に満ちた多忙な世界に関わるものではなかった。全ての仮名文学は柔弱さを特徴とし、微細さで貫かれている。それは指導したり打ち勝ったりするための道義的な強さや知的な力を持っていない。後の時代の仏教者たちは、確かに、仮名で書かれた本を出すことによって、自分たちの宗教的な教義を広めようとした。しかし、ルターのドイツ語聖書や謹厳なキング・ジェームス欽定訳聖書とは違って、これらの書物は、日本人の特性の底にまで貫通して揺り動かすだけの道義的な雄々しさや説得的な強さに欠けている。実際仮名書きは形状からみて美しく釣整がとれていて、日本の土壌に根付いたものではあるが、生き生きした力や精神の偉大な力で相手の心に迫って揺り動かすような情感はない。形は

beautiful form, but without life. Therefore it was utterly and morally impossible that the manlier writings of China, produced by Confucius and Mencius, should be superseded by the effeminate literature clothed in the simple and graceful *Kana*. In this, as in other experiments, the mere cultivation of aesthetic tastes and luxurious refinement, to the neglect of morality and the higher truths, will never do. The harmonious growth of the true, the good and the beautiful is essential to strength and solidity. In this respect the *Rōmaji* movement holds more hopeful vantage ground. It introduces the quaint, picturesque, national imagery of thought to the stirring, practical, scientific West, and brings Japan more easily and rapidly into invigorating contact with the brain power and mental force of an advanced civilization; while it liberates from the cumbersome conservatism of Chinese literature, and from a too great appreciation of its cold, formal systems of philosophy.

Tsurayuki was the author of many excellent poems. It is difficult to give suitable specimens, for one is bewildered in their selection, when myriads of most beautiful lines are left to the choice.

The poem found in the *Hyaku-nin isshu* is well known: —

Hito wa iza
Kokoro mo shirazu;
Furu sato wa
Hana zo mukashi no
Ka ni nioi keru.

Men's heart, —is it not so?
No man can ever know.
But this dear old lodging place!
Here fidelity I trace;
For the spirit of the flowers,
Bring me back the golden hours.
Fragrance from the "long ago,"
Through the blossoms that I know;

美しいが命がない。であるから、孔子や孟子によって生み出された男らしい漢文が、簡素で優雅な仮名をまとう女々しい文学によって取って代わられるということは、断じて道義的に不可能であった。この点では他の実験でもおなじだが、道徳やより高い真理を無視し、単に審美的な趣向や贅沢好みの改善で文明化しても功を奏することはない。真善美の調和のとれた発展が、力と堅実さの基本である。この点では、ローマ字運動の方が希望のもてる領域である。それは、古風で表現力に富んだ日本的な描写に心を揺り動かし、実際的で科学的な西欧を紹介し、より簡単に速やかに日本を先進文明の頭脳力と精神力とに生き生きと接触させるに違いない。他方、それは中国文学のやっかいな保守主義と、その冷たい形式的な哲学の過大な評価から日本を解き放つであろう。

貫之は優れた歌をたくさん詠んでいて、彼にふさわしい見本を挙げるのは難しい。というのも、とてもすばらしい無数の歌から選ぶことになるので、その選択にとまどってしまうのである。

百人一首にある次の歌はよく知られている。

人はいさ心も知らずふるさとははなぞ昔の香に匂ひける

人の心は誰も知ることができない
　――そうではないか？
それにしても、この懐かしい宿よ。
　ここに私は忠節を憶える。
花の精霊が
　私を昔のすばらしい日々へと連れ戻してくれる。
“遠い昔”からの香り、
　私がよく知っているあの花の。

Just the self-same cherry odor,
  And the plum can be no other;
While the roses' bosom bare
  Lie upon the fragrant air, —
Ah, I know the flowers are true,
  Can I know the same of you?

Tsurayuki was accustomed to visit the shrine of Kwannon at Hatsuse. On the way coming and going, he rested at an inn which became as familiar as a home to him. For some time, however, he ceased going there and seemed to dislike the house. After a prolonged absence he again returned, and was flatteringly received by the landlord who complained of his neglect, saying: "Although you are such a stranger here we have not changed toward you." Tsurayuki answered in the lines cited above; to which the landlord responded:

Hana dani mo
Onaji kokoro ni
Saku mono wo
Ue ken hito no
Kokoro shira nan.

So, if you trust the fragrance of my flowers,
  And they recall the happy by-gone hours,
The heart of him, who plants, is loyal too,
  And by their odors breathes a spirit true.

In the 9th year of Tenkyō (930, A.D.) Tsurayuki was taken ill, and knew that he was dying. He sent a poem to his friend, Kintada, alluding to his anticipated death: —

全く変わらぬ桜の香り、
　その実もまた違うものではありえぬ。
花の懐に、何もまとわず、
　かぐわしい香りに抱かれ
あぁ、私は花は真実だと知っている。
　あなたもそうだと信じていいだろうか。

貫之は初瀬にある観音に詣でるのを常としていた。その行き来の道で彼が自分の家ほどに親しみを持つようになった宿で休んだ。しかし、しばらくの間彼はそこへ行くのをやめ、その家を嫌いになったようにみえた。長い月日を経た後に、貫之は再びやってきた。宿の主人は「あなたはこの辺にすっかり疎遠になられたが、私たちの方はちっとも変わっていませんのに」と彼にへつらうかのように不平を言って、貫之を迎えた。それに対して貫之は上に紹介した歌で答えたのだが、この歌に対して、宿の主人も歌で返した。

花だにも同じ心に咲くものを植ゑけむ人の心しらなむ

もし、私の花の香りを信じ、
　それが過ぎ去った時を思い起こさせる　というのなら、
それを植えた者の心も同じように忠実です。
　その香りに真実な心を知ってください。

天慶9年（930年）、貫之は病におち、自分でも死にそうだと思った。友達の公忠に死を予期する歌を送った。

Te ni musubu
Mizu ni yadoreru
Tsuki-kage no
Aruka naki kano
Yo ni koso arikere.

Moonbeams dipped within the lake to lave,
While a path of silver crossed the wave;
Then the water trembled with delight,
And the lifted clouds revealed the sight.

So I stooped and placed my open palm,
Where the shadow-moon, lay full and calm
On the quivering liquid of the lake,
In my hand the lustrous globe to take.

There I held the restless world of light,
Till a passing cloud swept out of sight
All the merry moonbeams bathing there;
While the waves sank down in dark despair.

Thought I then, how like existence this,
For one fleeting movent [moment] we have bliss;
Scarce the conscious gift of life we've got
Ere a cloud sweeps past, and lo, tis not!

His daughter became a noted poetess. The following story may be related here for the insight it gives in the spirit of those times. During the period of Genriaku [Tenriaku] (947-957 A.D.), the celebrated plum-tree, growing in the Imperial gardens, withered and died. Officers were sent in search of

手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

手に汲んだ水にも月の光が光っている。
　銀のさざ波が寄せてくる。
水は喜びに震え、
　雲の影から月影がもれる。

私は両手で水をすくい、
　そこに月の姿がはっきり、静かに宿っている。
私の手のさざ波立つ湖に、
　輝かしい世〔地球〕がひろがる。

ここに、移ろいやすい光の世界を保つ、
　過ぎゆく雲が、水面（みなも）に浮かぶこころよい
月の光を、視界から消し去るまで。
　その時、さざ波は暗闇の絶望に沈む。

そこで私は考えた、人生もかくのごとしと、
　ほんの一瞬、我らは無上の喜びを味わう。
我らが知りうる人生の贈り物はほんのわずかだ、
　見よ、雲がさっと通り過ぎぬまに。

彼の娘は名高い女性詩人になった。以下の話は、このような時代の精神に洞察を与えるものとしてここに記してよいだろう。天暦期（947-957年）帝のお庭に生えていたすばらしい梅の木が枯れてしまった。役人たちが、

another sufficiently beautiful to be substituted in its place. They found one in a private garden. Vested with Imperial authority, they uprooted the fine tree. The young lady who owned the garden wrote some lines on a slip of paper, which she fastened it to one of the boughs.

When the plum-tree was planted in the palace garden the emperor came out to see it, and happened to observe the paper. Upon reading, he was surprised to find these chaste, and poetical lines: —

Choku nareba
Itomo ka si koshi
Uguisu no
Yado wa to towaba
Ikaga kotaen?

The Royal Will will have it so:
I cannot help it, it must go!
  The roots lie bare
  In my garden there.
The blossoming branches used to hide
The nest of the nightingale's modest bride;
  From afar he'll roam,
    To seek his home—
What shall I say when the nightingale comes?
What shall I say, if with Spring he returns?

On inquiry it was found that the tree came from the garden of Tsuyayuki's daughter, and it was instantly returned to her. This is the history of the famous *Ō-shiku-bai* (the plum-tree where the nightingale dwelt).

その場に植えかえるにふさわしい木を探すために送り出された。彼らは、ある家の敷地に一本見つけた。帝のお墨付きをもった者らがそのみごとな木を抜いた。その庭の持ち主であった若い女性が一枚の紙に歌を書いて、木の枝に結んだ。

その梅の木が大邸宅の庭に植えられると、帝がそれを見に出てこられて、その紙を見つけて読まれた。そしてその洗練されたすばらしい詩に驚かれた。

勅なれば　いともかしこし鶯（うぐいす）の宿はと問はば　いかがこたえむ

帝のご意志とあらば、しかるべく。
移すほか致しかたない。
　根っこが丸出しで、
　そこの私の庭におかれている。
花の枝は隠していたものだ、
うぐいすの慎ましい夫婦の巣を。
　遠いところから叫ぶだろう、
　自分の家を探して。
うぐいすが来たら、私はなんて答えよう。
春になって、うぐいすが帰ってきたら。

そこで調べてみると、その木が貫之の娘の庭から来たのがわかったので、すぐに彼女の元へ返された。これが有名な鶯宿梅の由来である。

要旨

植村正久（1858-1925）の “Biographical Sketches” はF.W.イーストレーキ編集の *The Tōkyō Independent* に掲載された日本古典文学の評論である。その紙面が変色していたため、翻刻しながら丁寧に読む必要があった。この作業を通じて、これらの評論が単に西洋人への日本古典の紹介ではなく、彼のキリスト教信仰にも影響を与えていると確信するに至った。

植村は、海老名弾正との福音主義論争や、内村鑑三不敬事件に際して発表された「敢えて世の識者に告白す」から知られるように、キリスト教をオーソドックスに語り、かつ社会的視野を以て政治的圧力と戦える人である。彼の論争的発言には、論敵の問題点を白日の下に曝す鋭さがあり、現代の我々にも了解可能である。しかし、植村には、自分自身が困難のなかで祈りあかし、教会員や学生一人一人の心に寄り添う情にもろい、論理では伝えきれない側面もあった。そのような姿を物語る証言は事柄の性質上個人的で、その上植村びいきの発言として無視されることが多い。この欠如を補うものとして文学論が助けになるのではないか。ことに今回紹介する “Biographical Sketches” は、英語とキリスト教文化を介することで、植村の時代から遠く離れた現代の我々に、植村の「感性」と、彼が「内なるもの」へ託した思いを伝えている。

“Biographical Sketches” は1886年1月から2月にかけて、1. 菅公（菅原道真）、2. 西行、3. 平家物語、4. 紀貫之の4篇発表されたが、「菅公」は見つかっていないので、西行以下の3篇を翻刻・翻訳し、それらについて筆者が着目した点を解題として付した。

「西行」では、西行の出家について、世を捨てた宗教者の姿が描かれている。他方で西行が歌と美に託した願いについては肯定的に捉えている。こうして描かれる彼の禁欲と内面の情熱への共感が興味深い。「平家物語」では、「諸行無常」の仏教的世界について鐘の音を題材に触れている。中心は興亡の激しい武士の時代に清盛という権力者に弄ばされた「白

拍子」が仏教に帰依する物語で、「仏性」の平等を紹介している。これは植村の仏教論への入り口になったと思われる。以後、日蓮・法然によって、武士にとっての仏教とは何か、それが社会的にどう継承されていくかを問題にしていく。この点については稿を改めるが植村にとって宗教は本質的に「エートス」だったのではないか。「紀貫之」では、『土佐日記』や『古今和歌集』の序などを取り上げて貫之が模索した文学表現について語り、併せて植村自身の和漢文学論を披瀝する。さらに、貫之の和歌では、「花鳥風月」の詠嘆の世界を描くと共に、人が心のうちで憧れる「永遠」への思いを英訳詩に滑り込ませているのが興味深い。

“Biographical Sketches” が、日本のキリスト教受容に際して起こった文化接触・交流の解明に役立ち、さらに文化と宗教との関わりについて研究を深める手がかりになることを願う。